

コロナ禍における礼拝・交わりを神学的に顧みる

辻 幸宏

コロナになり2年半が経ち、第7波の最中にありますが、この間、各教会は礼拝の在り方に工夫し、対処してきました。当初は対処療法的なことも行われました。そして、YouTube や Zoom を利用が行われるようになり、教会として新たな活動も行えるようになりました。

しかし私たちはいま、現在の状況を、改革派教会として、神学的に確認し、提示することが求められる時期を迎えていると思います。特に「改革派教会として、神学的に」と語るのは、個人の信仰について考えるのではなく、主なる神の御計画・キリストの教会を形成すること・終末の完成に向けての歩みということに意識を起きつつ、主が御言葉をとおして何を語り、改革派信仰として教会は何を告白してきたのかを確認していこうと願っています。

ただこれらのことは多岐にわたることであり、整理して確認しなければ支離滅裂となりかねません。そのため、次回以降、下記の4つについて、話しを展開していこうと思います。

0. 主の摂理としての疾病・戦争・自然災害
1. 礼拝の在り方（聖餐式を含め）
2. 交わりの在り方（諸集会・愛餐会・教会間(中会)の交わり等）
3. 会議の在り方
4. 教会が行う愛の業（ディアコニア・執事活動）の在り方

0. 主の摂理としての疾病・戦争・自然災害

私たちは毎年、8月迎え、平和について考えます。とくに今年はウクライナにおける戦争が行われ、今までの20～30年という時代に与えられた平和を確認しつつも、これが恒久的なことではなく、主から与えられた恵みであったことを、改めて気付かされた思いがいたします。またこの間も、香港・ミャンマーでは、多くの人々の自由が奪われています。また他にも、主なる神を礼拝することもできない信仰的な迫害にあっている人々がいることを忘れてはなりません。

せん。

こうしたことは、自然災害や疾病においても同様のことを語ることができですが、聖書は、旧約・新約問わず、疾病・戦争・自然災害・迫害について繰り返し記し、あることが当然としています。ですから、いずれにおいても、「ない」平穏な時代を送ってきていたということが、どれだけ主なる神の恵みに満たされていたことであるかを、私たちは理解しなければなりません。

しかし私たちは、自然災害においても、今回のコロナという疾病においても、個人的な試練においても、突然襲ってきた災難と受け取ってしまいます。しかし主なる神は、すべてを御計画し、すべてにおいて御支配されています。そのため私たちは、一つひとつの事象の背後に主なる神の深遠な御計画と意図を読み取ることが求められます。

このときに注意しなければならないのは、「主の裁きをもたらされた」として、特定の人たちの罪の責任にすることです。こうした事象を、他者のこととするのではなく、自らに課せられたこととして、自らの信仰と生活を顧みることが求められています。

それは同時に教会が問われています。今回のコロナ禍にあっては、教会において一つに集まって礼拝することができなくなり、教会に一つにあつまって礼拝を行うことの意義が問われています。聖徒の交わりが問われています。会議の在り方、愛の業（ディアコニア）が問われています。各論に関しては、次週以降に確認していくこととします。

1. 礼拝の在り方(聖餐式を含めて)

主なる神が人を創造されたとき、「我々にかたどり、我々に似せて、人を造ろう。そして海の魚、空の鳥、家畜、地の獣、地を這うものすべてを支配させよう」と語られ、人を創造されました（創世記 1:26）。このとき、主なる神は「我々」と語られ、三位（御父・御子・御霊）における豊かな交わりの中に、私たち人間をおつくりくださいました。つまり私たち人間は、主なる神との豊かな交わりをもつものとして創造されたのであり、そのため、罪のない状態において、私たち人間は、神との交わりをもつため、神を礼拝し、神を讃美するものでした。その上で、主がおつくりくださったすべての被造物を正しく管理することが求められました。

そのため、罪により主なる神から離れた私たち人間ですが、主によって愛され、主の御許に帰ってくるのが許されたキリスト者は、主なる神を礼拝することが、生きる目的であり、最も祝福された状態にあります。ですから、主なる神さまがお招きくださる礼拝に集うことを大切にしなければなりません。礼拝の場に、主が臨在されています。

とくに主の晩餐（聖餐式）の礼典に与ることは、一つに集まった群れにおいて、教会が按手を行った教師において聖別されたパンとぶどう液に与ることが求められます。

そして教会に集まっての礼拝においては、説教を語る牧師と教会員、ならびに教会員相互の交わりにおいて、互いの霊的な交わりが与えられ、信仰の成長へと益するのだと思います。

ですから、コロナ禍にあって、リモート（YouTube 配信）において礼拝に与ることは、教会に来ることが物理的に困難な場合には有用ですが、リモートで礼拝を守っていれば、それで良しとするようなものではありません。従って、リモートにおける礼拝は、あくまで補助的な手段であることを忘れてはなりません。ましてや主の晩餐の礼典は、リモートにおいてパンとぶどう液を聖別されることはなく、リモートで主の晩餐の礼典に与ることはできません。

ただし、今回のコロナ禍にあって、主なる神は私たちにリモート配信という大きなツールをお与えくださったのであり、補助的でありながらも、なおも継続的・積極的に用いていくことが求められているのではないのでしょうか。

2. 交わりの在り方(諸集会・愛餐会・教会間(中会)の交わり等)

コロナ禍、人との接触が極度に恐れられ、諸集会や愛餐会が中止され、今に至っています。その間に、会議や講演会などはリモートで行われるようになり、それで事足りるような風潮があるのではないのでしょうか。

しかし、私たちキリスト者は、改めて交わりの大切さを確認しなければなりません。

聖書は、「彼らは、使徒の教え、相互の交わり、パンを裂くこと、祈ることに熱心であった」と語ります（使徒 2:42）。プロテスタント教会、特に私たち改革派教会は、礼拝における御言葉の説教、聖礼典（洗礼・主の晩餐）、祈りの重要性を繰り返し確認してきました。しかし聖書はこれらに「相互の交わり」を加えています。改革

派教会においても、神学的に「聖徒の交わり」を考えることがなかったのではないのでしょうか。

しかしウェストミンスター信仰告白は、交わりの重要性を考えていたということができるとおもいます。第 25 章「教会」、第 26 章「聖徒の交わり」、第 27・28・29 章「聖礼典、洗礼、主の晩餐」と告白しているからです。

そして 26:1 では、「自分たちの頭であるイエス・キリストに、かれの霊により、信仰によって、結ばれているすべての聖徒たちは、イエス・キリストの、恵みの賜物・苦難・死・復活・栄光において、かれとの交流をもつ。また、聖徒たちは、愛において互いに結ばれているので、互いの〔一般的な〕賜物と恵みの賜物にあずかる交わりをもっており、内なる人においても外なる人においても〔内的にも外的にも〕相互の益となるような、公的、私的な義務を果たさなければならぬ」と告白しています。

礼拝においてキリストとの霊的な交流を求めるキリスト者は、キリスト者相互においても直接交わりを持つことにより、互いに理解し合い、愛の交流をもつことが可能となります。そして、リモートで行うことができるのは、十分な交わりが行われ、相互理解が十分に行われている相手において、初めて成立するのではないのでしょうか。

「以心伝心」という言葉があります。また、「一を聞いて十を知る」という言葉があります。教会における交わりにおいて、隣人愛をまっとうしようとするとき、最終的に、牧師と教会員間、また教会員間において、以心伝心、一を聞いて十を知る関係になることが理想ということができるとおもいます。しかしこうした関係性の形成は、家族の中であっても時間をかけて形成することであり、こうした関係性は簡単に形成することはできません。

こうしたことを行うためには、交わりを密にすることから始めるしかありません。最低でも教会に集まっている方には挨拶をすること、休んでおられる方のために祈ることが必要かとおもいます。宗教改革者カルヴァンは、「キリスト教綱要」の冒頭において、「我々の知恵で、とにかく真理に適い、また堅実な知恵と見做されるべきものの殆ど全ては、二つの部分から成り立つ。すなわち、神を認識することと、我々自身を認識することである」と語ります。私たちが、神を信じるために求められることがこの二つであるとすれば、私たちがキリスト者として、教会において信仰生活を送るためには、これら二つに加えて、隣人である教会員を知ることが挙げられます。

パウロは、「自分を過大に評価してはなりません。むしろ、神が各自に分け与えてくださった信仰の度合いに応じて慎み深く評価すべきです。というのは、わたしたちの一つの体は多くの部分から成り立っていても、すべての部分が同じ働きをしていないように、わたしたちも数は多いが、キリストに結ばれて一つの体を形づくっており、各自は互いに部分なのです。わたしたちは、与えられた恵みによって、それぞれ異なった賜物を持っています……」（ローマ 12:3～6）と語ります。教会員一人ひとり個性があり、主から与えられた賜物があるからこそ、教会におけるそれぞれの賜物にふさわしい奉仕が与えられ、奉仕を行うことにより、主なる神と教会員に仕えることができます。教会員の方々は、牧師とつながっていれば良いではありません。教会員相互に、互いに理解し合い、交わりを深めることが大切です。

交わりが浅く、互いに十分な理解がないと、何気ない一言において、人を傷つけることとなります。正しいことを伝えたとしても、相互理解がなければ、誤解を招いたり、相手が傷ついたりすることを忘れてはなりません。その結果として、教会から離れてしまうこともあります。

最初に、「以心伝心」、「一を聞いて十を知る」という言葉を挙げましたが、互いの間に十分な交わりがあり、理解があればこそ可能となるのであり、互いに十分な理解ない中、こうしたことは期待してはならず、互いに言葉を交わすにしても、言葉を慎重に選んで語ることを忘れてはなりません。

改革派教会は、「中会主義」であるとも語られます。つまり、各個教会において交わりを深め、教会が成長すれば良いではありません。「相互牧会」という言葉が用いられますが、大宮教会だけではなく、埼玉東部地区の各教会・教会員、さらには東部中会の各教会・教会員との交わりが深められることが大切かと思えます。つまり各個教会で様々な問題が生じますが、当該教会だけで解決をはかろうとするのではなく、地区や中会という交わりにおいて解決をする方が、建德的・健全な解決を行うことができるかと思えます。複数の牧師、より多くの長老が集まることにより、問題解決に求められる知恵が与えられ、またより多くの方々に祈っていただくことができるからです。

正直なところ、私自身、東部中会はそれ以前から各個教会主義の雰囲気を感じていましたが、特にコロナ禍にあり、教会間・中会な

どにおける交わりが極端になくなり、各個教会主義の傾向が強くなっていることを心配しています。これでは本来持っている中会の存在意義がなく、少数者であるキリスト者としての信仰が強くはなりません。互いの教会との交わりを深め、互いの教会の状況を祈り合い、助け合う関係を形成することが求められています。

東北中会や四国中会で顕著になっていますが、一教会に一人の牧師は当然ではなくなっています。一人の牧師が、二つ三つの教会・伝道所の責任を持つことが常習化しつつあります。埼玉東部地区においても、7教会を3人・4人で牧会することも、近い将来避けて通ることができないかと、私は思っています。そうであるならば、3人・4人の牧師が、7つの教会を相互牧会し、責任を分担しあうことのための備えも行っておく必要があります。連合小会が組織され、互いの教会の問題を牧師・長老間で共有することも求められています。

3. 会議・集会の在り方

コロナ禍にあり、生活が大きく変化しましたが、その一つに、リモート会議・リモート出社が挙げられます。教会においても、中会・大会などの委員会や、講演を伴う集会などの多くがリモートで行うようになりました。

確かにリモートで行うことにより、時間と旅費の節約になります。しかし、仕事においてリモートを用いることと、教会においてリモートを用いることには、違いがあるということを忘れてはなりません。すべてとは言えないでしょうが、仕事においては、相手は知らなくても、その内容を確認できれば、仕事を行うことができます。会議においてはその仕様を確認・決定すればよいわけです。しかし、教会における会議においては、神の臨在の下にあって、決議を行っていきます。特に個人的な事柄が取り扱われるとき、聖徒の交わりが行われ、神との交流と共に、各人の交流が行われることにより、初めて判断し、決議することが可能となります。そうしたことから、小会などにおいては、安易にリモートで行われるべきではありません（※現在では、小会をリモートで行う教会が、少なからずあるのが現実ですが……）。

ただし、中会・大会レベルの委員会などは、取り扱い事項がある程度定まっており、リモートで行うことができることは、少なからず有益であるということができるとおもいます。

また、講演会形式で行われる集会などは、ただ学ぶということにおいては、リモートで行われることにより、今まででは参加することができなかった集会に参加できるようになると言うことでは有益かも知れません。しかし、教会の交わりであり、集会をとおして行われる聖徒の交わりも大切にしていけることが求められているかと思えます。

そのためこうした集会では、安易にリモートで行うのではなく、現地で集まって集会をしつつ、同時に、リモートにおいても行われる、いわゆるハイブリッドの形で集会が行われることに意義があるかと、現時点では思っています。

リモートで行うことができるようになり、便利になり、楽になった部分もあるかと思いますが、しかし私たちキリスト者は、直接会うことによって行うことができる聖徒の交わりを疎かにすることなく、大切にすることが求められているのではないかと思っています。

4. 教会が行う愛の業(ディアコニア・執事活動)の在り方

改革派教会では、キリストの預言者・祭司・王としての働きが、教師(牧師)・執事・長老に委ねられていることを確認し、長老主義教会を形成しています。そのため、御言葉の説教を司る教師、教会統治を行う(治会)長老と共に、愛の交わりを行う執事の働きが重要となります。

執事の働きとして、教会の皆さまが思い浮かぶのは、会計の働きかと思えます。主から託された財を正しく分配することが求められることから、会計は執事が取り扱います。しかし、執事の働きの中心は、愛の業・愛の交わりであり、教会員や隣人への配慮が何よりも大切になってきます。執事が会計に携わるのは、財の配分を行うにあたって、教会員・隣人への配慮をもって行われることが求められるためです。

しかし愛の業は、霊的な交わり(聖徒の交わり)が充分に行われることにより、互いのことを知り、それぞれの苦しみ・悲しみを共有することがなければ、事務的な作業・形だけになってしまいます。そのため、相手のことを思いやる心が何よりも大切になってきます。それは勝手な思い込みではなく、直接交わり話しをすること、祈ることから始まります。

コロナ禍にあって、教会でも極端に交わりが少なくなりました。特に、高齢の方々、遠方に住んでおられるの方々など、礼拝から遠ざかっている人たちとの交わりを希薄にしてはなりません。カルヴァンは、神を知ること・己を知ることこそが、信仰にとって大切なことを語っていますが、神を知り・己を知るために、神との交わり・礼拝が大切でした。それと同様に、隣人を知るためには、交わりがなければならず、交わりが深まることにより、隣人愛が生じ、愛の奉仕・交わりが可能となります。

コロナ禍にあって、リモートが用いられるようになりました。仕事における関係、あるいは互いに理解し合い、意思疎通が充分とれる相手であれば、非常に有用ですが、霊的な関係性を深め、愛の交わりを行うためには、安易な方法を行うのではなく、直接交わることを疎かにしてはなりません。そして執事ばかりか、信徒一人ひとりが交わりの大切さを認識し、互いの霊的な交わりを深めていくとき、キリストの体としての教会が成長していくのだと思います。